

埼玉の三偉人を考える

県の道徳本を視点を変えて読むと

本誌編集委員 山口 勇

埼玉の三偉人について

日本人は「3」という数字が好きのようです。「日本三景」、「三大祭り」、「三名瀑」、「御三家」、「三種の神器」、「三人娘」など数えあげたらきりが無いほど三人の組み合わせを作ります。埼玉県では2005年より埼玉県出身のいわゆる偉人の顕彰を始め、この中から特に三人を選びだし「埼玉の三偉人」として県民に紹介しています。その三偉人とは、荻野吟子、渋沢栄一、塙保己一です。この三人は偉人であることは間違いありませんが、全く業績の違う人をただ三人集めることにどれだけの意味があるのか、またなぜこの三人なのかよくわかりません。

埼玉県教育委員会は2010年度より道徳の副読本を作成し、各校に配布して

います。小学校低学年（きょうもげんきに）、中学年（みんななかよし）、高学年（夢にむかって）、中学校（自分をみつめて）の4冊ですが、それぞれの本の中に「埼玉の三偉人」の話が掲載されています。学校によってはかなり強制的に使うよう指導を受けていると聞きます。しかし内容を吟味してみるとかなり問題を感じた話も含まれています。今回は4冊の道徳本の中の三偉人の記述について考えてみたいと思います。

荻野吟子

荻野吟子は女性史を研究するうえで欠かせない人物であり、その波乱万丈な人生は十分顕彰してしかるべきだと思います。しかし県の道徳本（小高学年・中学校）では、病気にかかり女性として耐え

がたい経験をし、そのため医師を目指そうとするが、当時は女性に門戸が開かれていなかったため、たいへんな苦勞の結果、日本で最初の公認女性医師になったということが強調されています。これは渡辺淳一氏の小説「花埋み」が下敷きとなつていますが、吟子の性病説は否定する人も多く、地元の研究者の間ではもと吟子は腰の病気をもっており、子どもが産めない身体とわかったので協議離婚をしたという説もあります。

県は公認医師第一号を強調したいのだけですが、吟子のすばらしさはこれだけではありません。吟子は1886（明治19）年、洗礼を受け、東京キリスト教婦人矯風会で婦人の風俗改善、地位向上、禁酒運動、売春の廃止などを掲げて運動を始めます。これが日本における最初の婦人解放運動だといわれています。吟子

は風俗部長として活躍し、開設された国会に「一夫一婦制度の確立」、「海外売春婦の取り締まり」の二つの請願を出します。吟子は女性の人格の尊重、人権思想をはっきりと主張してきました。特に娼妓運動は暴力団を相手にすることもあり、危険な場面も多々あったといいますが、吟子は少しもひるまなかったといえます。これこそが吟子のすばらしさであり、女医一号以上に子どもたちに伝えた吟子の価値だと思います。

北海道に渡り、開拓団を相手に治療活動をしたことも語られるべきですが、吟子の人生はただひたすら女性の幸福を求め続けた一途な人生だったと思います。

洪沢栄一

荻野吟子、埴保己一については県外では知らない人も多いのですが、洪沢栄一の名は多くの人に知られています。第一国立銀行をはじめ、鉄道、製糸、造船など500社にものぼる企業の設立や育成にかかわり、近代日本の大実業家として教科書などでも記述されているからです。道徳本では、低学年（学校のたからもの）、中学年（一輪の花）、中学校（豊

かな日本を目指して）の三つのお話が掲載されています。

低学年版「学校のたからもの」では青い目の人形の交流に洪沢が中心となっただけで、かかわったことが記述されています。しかし人形の名前「マーサ・ヒース」は越谷大沢小の「ワデーラ・ヒズ」のことと思われませんが、この人形は他のものと一緒に箱に入り、宿直室の戸棚の中に入れていたもので、戦後校舎改築の時に偶然発見されたものです。だれかが隠したため守られたのですが、子どもや先生、地域の人たちが連帯して守ろうとした事実はありません。それよりも親善のために贈られた人形の多くが処分されたという戦争時における社会状況や学校のシステムこそ伝えなければならぬのです。洪沢は「維新後、時々いまわしい他国との戦争があつて、勝つた後はお互いに喜びますが、併し戦争を喜ぶということは人類の最も恥ずべきことである。」「武装平和というのは真の平和ではない。武装即戦である。」「軍艦を造るよりも、台場を築くよりも、飛行機よりも、潜水艦よりも国際連盟が必要である。」などの発言を残しており、同時代を生きた岩崎弥太郎などと比べてみると平和主義者

の側面を持っています。青い目の人形の交流もそうですが、嵐山町に小島乗真によってつくられた養護施設「埼玉育児院」に対して金銭的援助をしたりもしています。しかしこれだけの大実業家が、直接戦争反対を叫んだわけでもなく、結果としてばく大な利益をあげたということも事実です。このことを押さえながら、洪沢の良心的実業家の側面を見ていく必要があると思います。

埴保己一

埴保己一については、良くわからないという人も多いようです。それは「盲目でありながら」というように書かれており、盲目であることが強調されるあまり、彼の業績があまり具体的に書かれていないからです。このことは保己一に対しても失礼であり、盲目であろうがなかろうが、彼の書いた「群書類従」はすぐれた本であり、立派な仕事をなしたげた人だと思えます。

「群書類従」は保己一が中心となって、全国に散らばっていた日本の古今の国書（古記録や史料など）を整理分類したものです。これは保己一が幕府の援助を

受けてやった事業で、版木で印刷した全530巻、666冊にもおよぶという膨大な資料で、後の国学研究者のいわばバイブル的存在にもなったものです。

道徳本では低学年（やさしさを力にかけて）、高学年（盲目の学者・「群書類従にいどんだ塙保己一」）、中学校（嘆きを感謝に）で記載されています。しかし逸話が中心になっており、事実関係についてははっきりしない面もあります。

塙保己一はたしかに立派な学者であることはだれもが認めるところですが、本の具体的内容が伝わりにくく、庶民の暮らしと直接関係することが少ないため、子どもたちにとってはわかりづらい人物だと思えます。もし盲目ということを強調するならば、川越養寿院住職であった石井愚鑑が境内で遊んでいる盲目の子どもを見て憐れに思い、寺に盲児を集めて「訓盲学校」を設立した話の方が子どもにはわかりやすいと思います。この「訓盲学校」こそが現在の「塙保己一学園」なのです。

川越にある「県立盲学校」を、多くの関係者の反対にもかかわらず、川越にほとんど関係のない塙保己一の名前を使ってトップダウンで「塙保己一学園」と改

名させた県の方針にも疑問を感じるとともに、塙保己一に対しても失礼な話だと思います。

偉人はそれぞれの地域にいる

県の選定した偉人の中には、秩父事件に関係した人、足尾鉍毒事件をたたかった人、農民運動の指導者などは含まれていません。それぞれの地域を調べてみると、地域の発展につくした人、民衆のためになたかた人などがいます。そのような人こそ地域の偉人として道徳で取り扱うべきだと思います。



(写真と本文は関係ありません)